

# 平安京跡・史跡西寺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告  
二〇〇七―四

平安京跡・史跡西寺跡

2007 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所







# 平安京跡・史跡西寺跡

2007年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかっていく事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび児童館新築工事に伴う平安京跡・史跡西寺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気付きのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

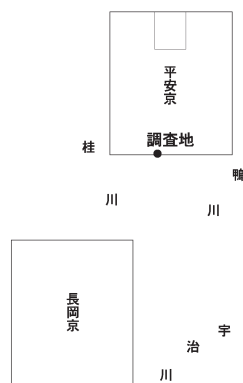
平成 19 年 9 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- |          |  |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名  | 平安京跡・史跡西寺跡                                     |
| 2 調査所在地  | 京都市南区唐橋西寺町 65 番地                               |
| 3 委 託 者  | 京都市 代表者 京都市長 梶本頼兼                              |
| 4 調査期間   | 2007 年 7 月 23 日～2007 年 8 月 20 日                |
| 5 調査面積   | 170 m <sup>2</sup>                             |
| 6 調査担当者  | 柏田有香   |
| 7 使用地図   | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「中河原」「梅小路」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系  | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）                |
| 9 使用標高   | T.P.：東京湾平均海面高度                                 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。              |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。              |
| 12 遺構番号  | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。                           |
| 13 遺物番号  | 通し番号を付し、写真の番号も同一とした。                           |
| 14 掲載写真  | 村井伸也・幸明綾子                                      |
| 15 基準点測量 | 宮原健吾   |
| 16 本書作成  | 柏田有香   |
| 17 編集・調整 | 児玉光世・山口 眞                                      |



(調査地点図)

0 2 4km



# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
(1) 歴史的環境	2
(2) 過去の調査	4
3. 遺 構	7
(1) 層序	7
(2) 遺構	10
4. 遺 物	11
(1) 遺物の概要	11
(2) 瓦	12
(3) 土器	15
5. ま と め	17

# 図 版 目 次

図版1 遺構	1	1区全景(北から)
	2	4区全景(東から)
図版2 遺構・遺物	1	2区全景(東から)
	2	4区溝5(東から)
	3	出土遺物

# 挿 図 目 次

図1 調査地位置図(1:2,500)	1
図2 調査前全景(北東から)	2
図3 作業風景	2
図4 調査区配置図(1:400)	3
図5 西寺伽藍想定配置図	4

図6	西寺関連調査位置図（1：2,500）	5
図7	1～4区遺構実測図（1：150）	8
図8	1～4区断面図（1：80）	9
図9	柱列実測図（1：50）	10
図10	柱穴3半裁状況（西から）	10
図11	5区遺構実測図（1：50）	11
図12	5区（北から）	11
図13	軒瓦拓影および実測図（1：4）	12
図14	丸瓦拓影および実測図（1：4）	13
図15	丸瓦5玉縁縄目	13
図16	平瓦拓影および実測図（1：4）	14
図17	文字瓦7	15
図18	土器実測図（1：4）	15
図19	伽藍復元図（1：400）	16

## 表 目 次

表1	西寺関連調査一覧表	6
表2	遺構概要表	7
表3	遺物概要表	12

# 平安京跡・史跡西寺跡

## 1. 調査経過

この調査は、児童館の新築工事に伴うものである。調査地は、京都市立唐橋小学校の敷地西端で、史跡西寺跡の中門と金堂を結ぶ西回廊推定地に該当する。そのため、西寺に関連する遺構を保存する必要があることから、児童館の建築場所や設計資料を得ることを目的とし、西回廊の正確な位置と遺構の遺存状況を確認するよう京都市文化市民局文化財保護課より指導を受け、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が調査を行った。また、西回廊と中門は、現在の唐橋小学校の校舎を建設するにあたり、1973年に鳥羽離宮跡調査研究所によって発掘調査が行われ、それらの成果をもとに伽藍の復元が為されている<sup>1)</sup>。しかし、その調査区の正確な位置が不明であり、今回一部を再調査することとなった。

調査区は既存建物を避けて、西回廊推定地に東西7m、南北18.5mに設定した(1区)。また、回廊外側への遺構の広がりを確認するため、既存建物の中に西に延長するトレンチを設けた(2・3区)。さらに1973年の調査トレンチを確認する目的で1区の南東部分を東に延長した(4区)。最後に、1区以北の遺構の残存状況を確認するための調査区を1区の約7m北に設けた(5区)。

調査は、重機で0.7～0.8m掘り下げたところで地山相当の砂礫層と、部分的に残存する平安時代前期の瓦を含む整地層を検出した。1区では、西回廊の西柱列推定ラインに近いところで南

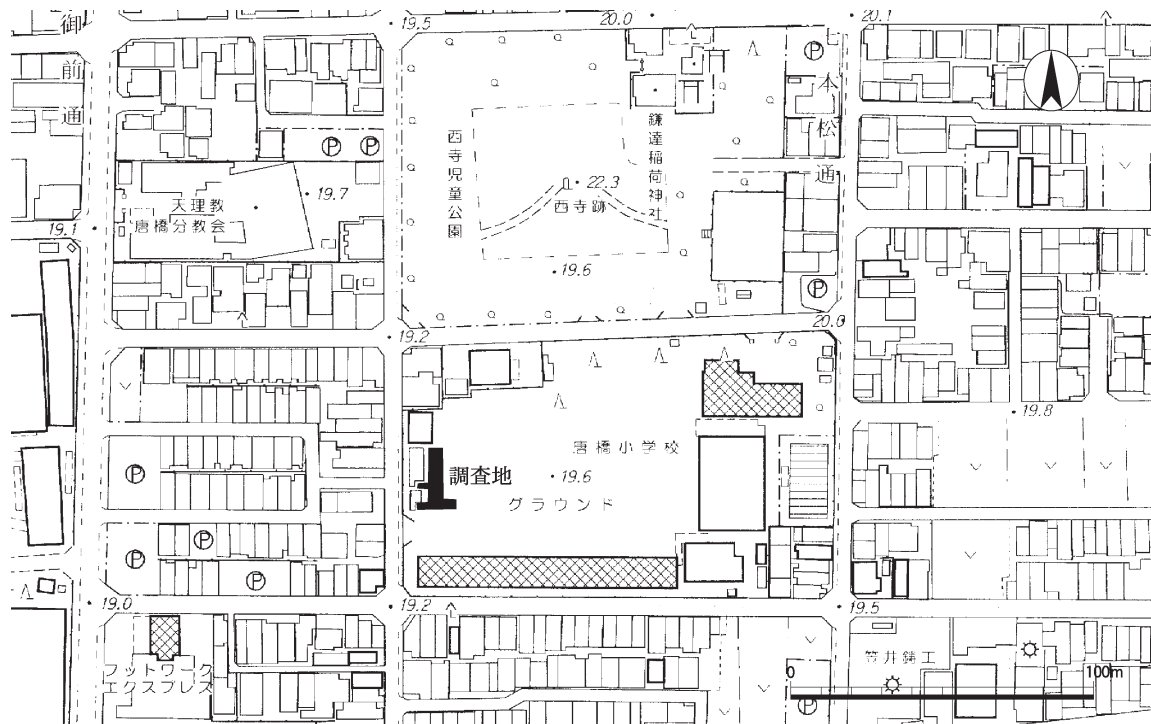


図1 調査地位置図 (1 : 2,500)



図2 調査前全景（北東から）



図3 作業風景

北3間分の柱列を検出した。2区・3区では整地層と考えられる瓦を含む層を検出した。4区では東半で、1973年調査トレンチの一部を確認した。遺構は保存されるため、掘り下げは最小限の範囲内にとどめ堆積状況の確認を行った。写真撮影と図面類の記録を行い、調査を終了した。遺構を土嚢で保護し、全面に厚さ5cmの真砂を敷いて埋め戻した。

なお、8月7日に、唐橋小学校の6年生約80名を対象に現場と遺物の見学を行った。

## 2. 位置と環境

### (1) 歴史的環境

西寺は、平安京内に建立された二つの官寺のうちの一つである。右京九条一坊九町から十六町がその寺域である。南大門は京の南端である九条大路に開き、東は皇嘉門大路、西は西大宮大路、北は八条大路に囲まれた8町を占有する。主要伽藍は南側4町にあり、北側の4町には子院が置かれた。西寺造営に関する史料は少なく、個々の建物の造立年代については不明な点が多い。以下に西寺造営に関連すると思われる主な史料の一部を抜粋した。

史料1「延暦十五年丙子。以大納言藤原伊勢人。為造寺長官。建立東西両寺以為東西両京鎮護。」『帝王編年記』卷十二

史料2「桓武天皇延暦十六年二月甲申。……従五位上守民部大輔兼行造西寺次官信濃守笠朝臣江人於右京職。」『類聚国史』卷百七

史料3「四年春正月。……癸酉。於東西二寺始行坐夏。其布施供養准諸大寺例。」『日本後紀』卷二十二 弘仁

史料4「三年。……三月戊辰。……丁丑。奉為柏原天皇。於西寺限七ヶ日。說法華經。」『日本紀略』日本後紀卷第三十四 天長

史料5「九年。……秋七月乙未。西寺講堂供養御願新造仏。莊嚴法物一十五種便即施入。」『日本紀略』日本後紀卷第四十 天長

史料6「六月壬申朔。……廿六日丁酉。……山城国稻三千束。大和国三千束。伊賀国穀二百五十斛。充造西寺塔料。並通用三寶布施料。」『日本三代実録』卷四十二 元慶六年

史料1・2から延暦十五・十六年(796・797)に相次いで造寺長官と造寺次官が任命され、このころから本格的に造営が開始されたことがわかる。また、史料3では、弘仁四年(813)に、東西寺に於いて始めて「坐夏」の儀式が行われたとあるため、この年までには、中門や金堂などは完成していた可能性が高い。史料4では天長三年(826)に西寺において柏原(桓武)天皇の国忌を行っている。他にも西寺で国忌を行う記事が散見され、国忌は基本的に西寺において執り行われていたと考えられる。また、史料5で天長九年(832)に講堂で御願新造仏の供養が行われたとあり、このころには講堂が完成していたと思われる。塔については、史料6で元慶六年(882)に稲や穀を西寺の塔を造る料に充てたとあることから、この頃から漸く造営が始まったのであろう。

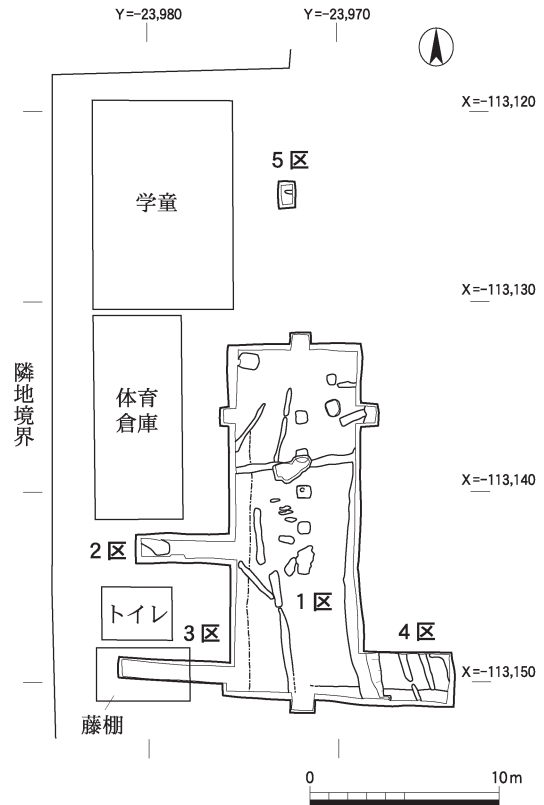


図4 調査区配置図(1:400)

さらに、造営過程にも増して不明な点の多いのはその廃絶時期である。

史料7「正暦元年・・・二月・・・二日。西寺焼亡。・・・八月・・・廿六日戊辰。西寺国忌也。造作之間。移于東寺。」『日本紀略』

史料8 天福元年十二月二十四日「戌終許、南方有火、風烈而烟不昇程、又遠而不弃其程、云々、久而滅了」、二十五日「朝天陰、巳時晴、下人説、夜火東寺由云々、乍驚以下人遣見、午時帰云、西寺乃内下人宅失火、吹付塔焼了云々、本自荒廢之寺、何為乎」『明月記』

史料7に正暦元年(990)二月に西寺は「焼亡」したとあり、大部分が火事で焼け落ちたと考えられる。また、同じ八月の記事には西寺で行う国忌を「造作」の間は東寺に移して行うとあって、再建されたことは間違いないが、どの程度まで再建されたかについてはわからない。その後、12世紀半ばまでは西寺の名が史料に見え、存続していたと考えられるが、東寺と異なり最後まで官寺としての役割を担った西寺は、律令体制の衰退に伴い鎌倉時代には急速に退廃したものと思われる。塔については他より遅くまで残っていたらしいが、それも史料8から天福元年(1233)には焼け落ち、しかもすでに荒廢していたからどうということもないと言われており、13世紀には寺としての機能は果たしていなかったと考えられる。

一方、西寺と左右対称の位置にあるもう一つの官寺であった東寺は、弘仁十四年(823)に空海に下賜され、私寺的な要素が色濃くなる。その後も、真言宗の総本山として信仰を受け、火災などにより幾度かの再建を繰り返すものの、造営当初の伽藍配置を踏襲してほぼ同じ位置に現存

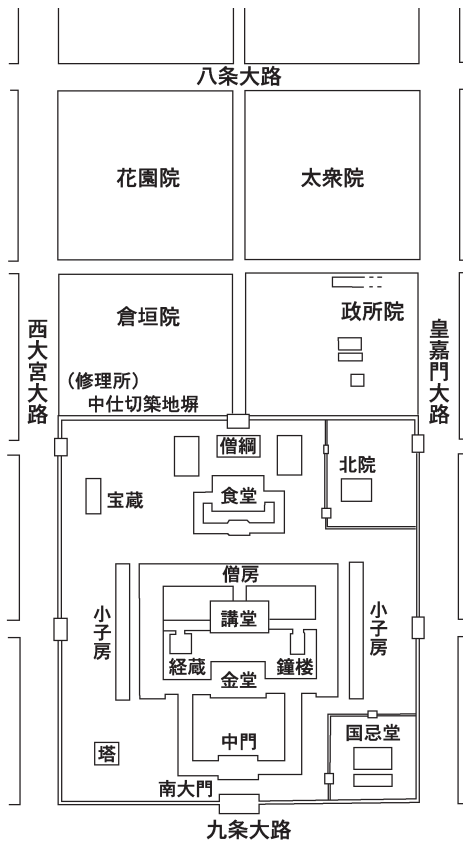


図5 西寺伽藍想定配置図  
(杉山 1994 の図をもとに一部改変)

している。そのことから対になる西寺の伽藍配置も東寺の配置から、ある程度推測することが可能であった。また、西寺跡には講堂址の土壇が残っており、梅原末治によって大正 8 年 (1919) に調査され<sup>2)</sup>、大正 10 年 (1921) という比較的早い時期に周辺を含め史跡に指定されている。さらに、伽藍中心部が昭和 8 年 (1933) に唐橋小学校の前身の七条第二尋常小学校の敷地となって大きな開発を免れたことから、平安京内においては遺構が比較的良好に保たれ、過去の発掘調査でも多くの成果が得られている。そして、東寺の伽藍配置と調査成果をもとにして、西寺の伽藍と子院の配置については図 5 のように考えられている<sup>3)</sup>。ただし、北側の子院が置かれた 4 町では調査事例が少なく、まだ不明な点も多い。また、西寺児童公園に土壇が残る講堂址については本格的な発掘調査が行われていない。土壇は高さ約 3 m あるが、これは後世に土盛りされたもので、本来の基壇の高さや規模についての詳細は不明

である。塔跡についても、これまでの調査ではその痕跡はみつかっておらず、正確な位置はわかっていない。

## (2) 過去の調査 (図 6、表 1)

西寺に関連する発掘調査は、過去 26 回行われている。調査 1～8 までの初期の調査は、平安博物館が実施した調査 4 を除き、杉山信三氏が主体となって行った。氏はその成果から西寺の伽藍中心線を割り出し、東寺の伽藍中心線との距離を測定して平安京の造営尺を導き出して、条坊復元の基準とした。西寺の調査は、その伽藍復元に留まらず、平安京全体の条坊復元に大きく寄与するものであったと言える。

最も古い調査は 1960 年に遡る東僧坊の調査である。これ以後、食堂院や南大門、小子房などが次々に調査され、東寺の伽藍配置をもとにしたおおよその推定位置で検出されている。調査 4・16 では東回廊のさらに東側で築地状遺構と門が検出されている。これは東寺では灌頂堂に対応する位置にあたるが、杉山信三氏は文献の記述から西寺では天皇・皇后の国忌の儀を行う「国忌堂」跡にあたり、検出された門は、東寺灌頂院東門に対応するものと推定している<sup>4)</sup>。調査 23 では、伽藍北限と考えられる位置で瓦葺の築地跡が検出された。この位置は、現存する東寺の北大門に取り付け築地塀とほぼ同一線上にあり、主要伽藍とその北に位置する子院とを 2 分する築地塀と考えられるが、東寺北大門に相当する門跡は西寺では検出されていない。また同じ調査で、伽藍北



図6 西寺関連調査位置図 (1 : 2,500)

表1 西寺関連調査一覧表

No.	推定地	調査地	調査年	調査主体	成果	文献
1	東僧坊	唐橋西寺町 (西寺児童公園)	1959	奈文研	基壇、礎石抜き取り穴、礎石	鳥羽研編『史跡西寺跡』1979年
2	食堂院	唐橋西寺町	1962	奈文研	南門と回廊の礎石・礎石抜き取り穴	鳥羽研編『史跡西寺跡』1979年
3	食堂・南大門 ・東西僧坊・ 東小子房	唐橋西寺町 (西寺児童公園 ・唐橋小学校・ 周辺道路)	1962	奈文研	金堂基壇延石・地覆石、南大門 礎石抜き取り穴、東僧坊雨落ち 溝・延石、西僧坊礎石抜き取り 穴、東回廊延石、東小子房	鳥羽研編『史跡西寺跡』1979年
4	推定国忌堂	唐橋西寺町 (唐橋小学校)	1970	平安博物館	東西方向の築地遺構、大溝	鳥羽研編『史跡西寺跡』1979年
5	大炊殿	唐橋西寺町40	1972	京都市保護 課、鳥羽研	礎石抜き取り穴	鳥羽研編『史跡西寺跡』1979年
6	中門・西回廊	唐橋西寺町 (唐橋小学校)	1973	京都市教委、 鳥羽研	中門西縁基壇、西回廊雨落ち溝 ・暗渠	鳥羽研編『史跡西寺跡』1979年
7	東小子房	唐橋西寺町64	1973	京都市保護 課	雨落ち溝、ピット群	『京都市埋蔵文化財年次報告 1973-II』京都市保護課1975
8	中門・東回廊 ・南大門	唐橋西寺町 (唐橋小学校)	1974	京都市教委、 鳥羽研	中門延石・階段、東回廊延石	鳥羽研編『史跡西寺跡』1979年
9	北僧坊	唐橋西寺町57 (鎌達稲荷神社)	1974	京都市保護 課	礎石抜き取り穴	『京都市埋蔵文化財年次報告 1974-IV』京都市保護課1976
10	東僧坊	唐橋西寺町 (西寺児童公園)	1977	京都市研	基壇西辺、礎石抜き取り穴、雨 落ち溝	『平安京跡発掘調査概報Ⅱ』 京都市研1978
11	南限築地	唐橋西寺町65 (唐橋小学校)	1977	京都市研	柱穴、溝状遺構	
12	西限築地・大 炊殿・食堂院 北方井戸	唐橋西寺町	1977～ 1978	京都市研	西限築地の凝灰岩・暗渠、大炊 殿礎石抜き取り穴、井戸	『平安京跡発掘調査概報Ⅱ』 京都市研1978
13	西小子房	唐橋西寺町27	1977	京都市研	基壇、礎石抜き取り穴、溝	『西寺小子房跡』京都市研1978
14	東僧坊・ 東回廊・ 金堂東軒廊	唐橋西寺町65 (唐橋小学校)	1978	京都市研	東僧坊礎石抜き取り穴・雨落ち 溝、東回廊礎石、東軒廊基壇・ 延石	『平安京跡発掘調査概要』 京都市研1979
15	西寺寺院	唐橋門脇町35 (八条中学校)	1978～ 1979	京都市研	南北三間、東西十四間以上の掘 立柱建物	
16	東回廊・推定 国忌堂西築地 ・門跡	唐橋西寺町65 (唐橋小学校)	1979	京都市研	東回廊基壇・礎石抜き取り穴・ 延石、築地状遺構・雨落ち溝	
17	境内	唐橋西寺町65 (唐橋小学校)	1979	京都市研	土坑、瓦溜り	
18	境内	唐橋門脇町2	1980	京都市研	井戸	『平安京跡発掘調査報告』昭和 55年度 京都市研編1981
19	境内	唐橋西寺町 33-3	1980	京都市研	土坑、集石	『平安京跡発掘調査報告』昭和 55年度 京都市研編1981
20	西僧坊	唐橋西寺町30	1980	京都市研	基壇、土坑	『平安京跡発掘調査報告』昭和 55年度 京都市研編1981
21	西限築地	唐橋西寺町30	1981	京都市研	築地状遺構	『平安京跡発掘調査報告』昭和 55年度 京都市研編1981
22	食堂院	唐橋西寺町 55-2	1986	京都市研	西回廊基壇、礎石抜き取り穴、 溝、金属製品工房か	『平安京跡発掘調査概報』昭和 61年度 京都市研編1987
23	北限築地・ 綱所	唐橋門脇町29・ 30・31・44の 一部	1986	京都市研	礎石建物、築地跡、塀跡、井戸、 土坑	『昭和61年度 京都市埋蔵文化財 調査概要』京都市研1989
24	西寺寺院	唐橋門脇町35 (八条中学校)	1988	京都市研	掘立柱建物、礎石建物	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財 調査概要』京都市研1993
25	西寺寺院	唐橋門脇町 6・7	1989	京都市研	柱穴、溝、土坑、井戸	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財 調査概要』京都市研1993
26	西限築地	唐橋西寺町 35-12	2007	京都市研	湿地状堆積、土坑、柱穴	



限築地と食堂院の間に2棟の礎石建物がみつき、「綱所」と推定されている。食堂院回廊部分で行われた調査22では、回廊基壇の整地土下から柱穴と土坑状遺構が検出され、この土坑から多量の炭と共に窯体片、焼土・銅滓、埴埴などが出土している。共伴土器の年代から9世紀初頭頃のものと考えられ、回廊構築以前に西寺造営に伴う工房が存在した可能性が示唆<sup>5)</sup>されている。

また、主要伽藍北側の子院が置かれたと考えられる場所の調査では、八条中学校の校舎建て替えに伴い行われた右京九条一坊十町の調査15で、東西十四間以上、南北三間の北に庇をもつ東西に長い建物がみつかった。同じく八条中学校敷地内の調査24では東西5間、南北2間の四面庇建物とその南に接して東西7間、南北2間の建物が検出され、さらにその南で3間×3間の総柱礎石建物がみつかった。これらは、建物配置などから西寺の寺務を司る「政所院」に関する建物ではないかと推測<sup>6)</sup>されている。その西側、九条一坊十五町で行われた調査25では、埋土に焼土・灰・炭が混じり鉄屑や鞆が出土した土坑がみつかった。近辺に工房跡の存在が考えられ、「修理所」に比定<sup>7)</sup>されている。

### 3. 遺 構

#### (1) 層序 (図8)

1～3・5区では、現地表から50～70cmは運動場の盛土である(1～3層)。その下に旧耕作土と床土が10～25cm堆積する(4～6層)。それらを除去し、西寺に関連すると考えられる遺構を検出した。遺構検出面の標高は18.7～18.8mである。1区ではこの段階で、均質なシルト～極細砂層と多量に礫の混じる砂礫の地山相当層が露出していた。1区西端と2・3区では瓦や土器片を含む整地層と考えられる層を確認した(10・13・14層)。2区の断割調査では、この整地層の下に1区同様の地山相当層(15・16層)が認められた。

4区は、現地表から30～35cmが運動場の盛土、その下に約10cmの耕作土が堆積し、それを除去して遺構を検出した。4区東半分は、1973年の調査トレンチと重なるため、トレンチの埋め戻し土を除去して遺構を検出した。遺構検出面の標高は18.85～19.0mである。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	柱穴1～4、溝5、西回廊基壇整地土	
近代	瓦溜り6・7、耕作溝	

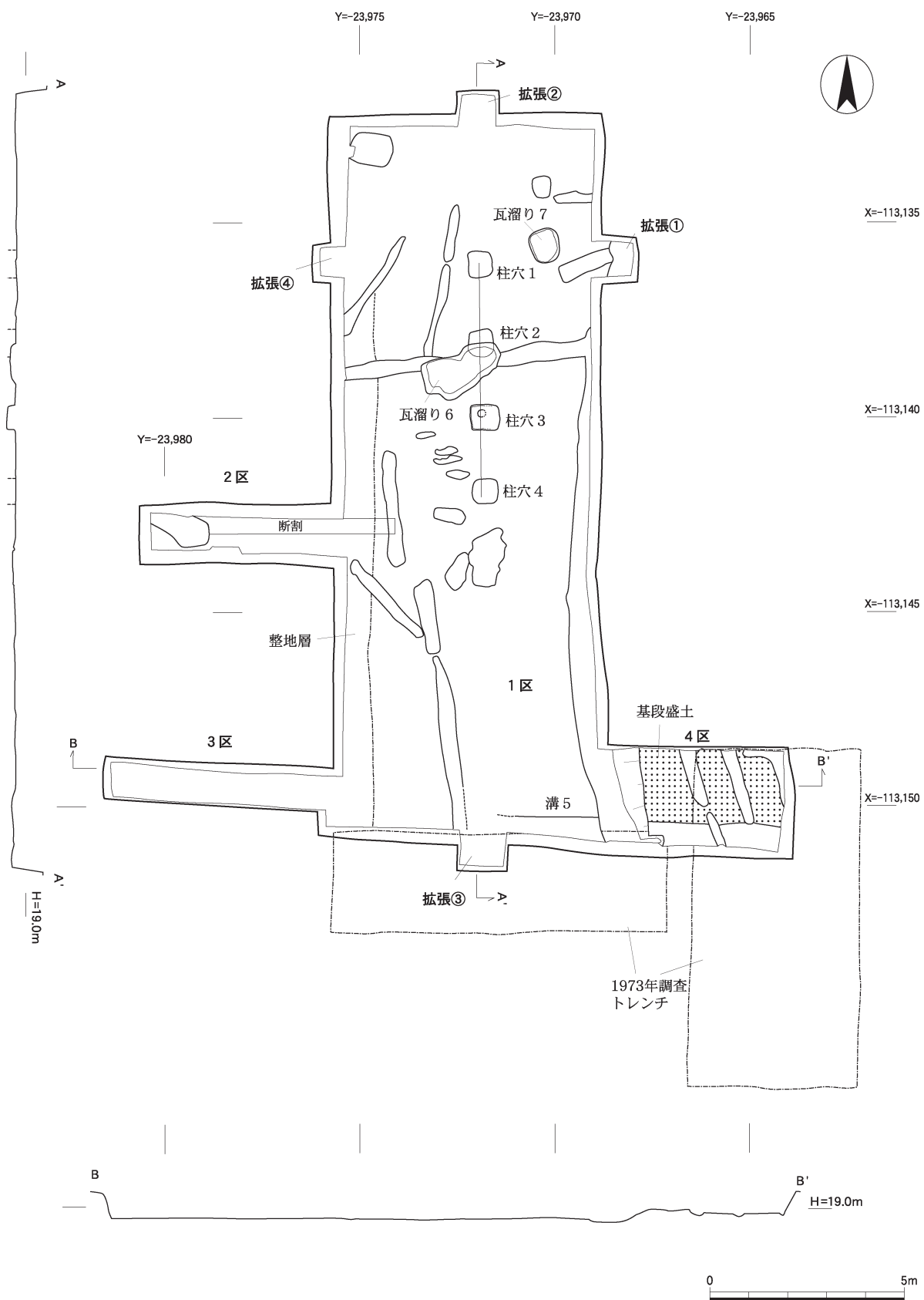
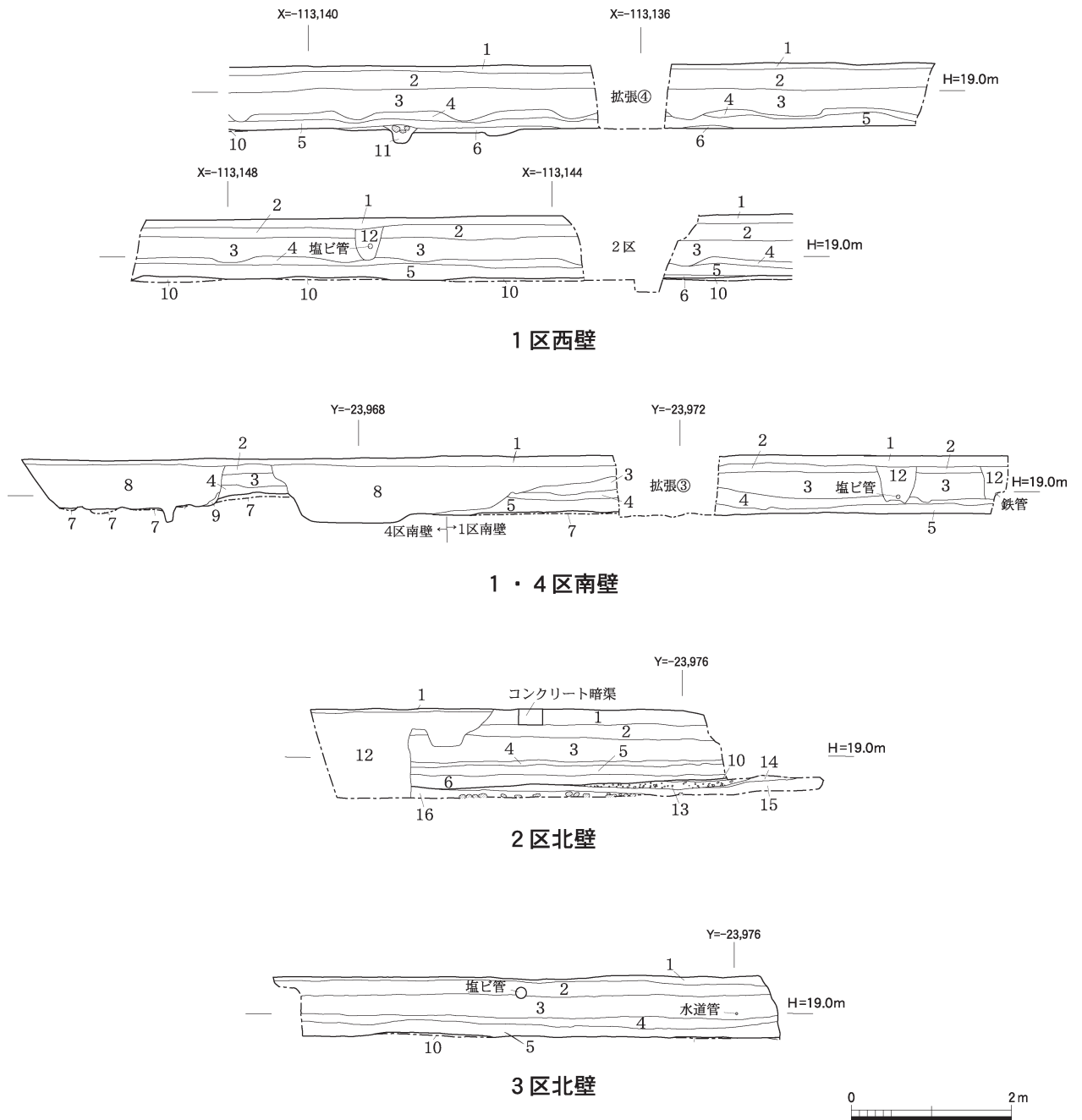


図7 1～4区遺構実測図（1：150）



- 1 運動場真砂土
- 2 運動場改良土
- 3 運動場盛土 レンガ・コークスなど多量混
- 4 2.5Y3/1黒褐色 粘質粗～極粗砂混シルト (耕作土)
- 5 2.5Y4/1黄灰色 極粗砂～小礫混シルト (耕作床土)
- 6 7.5YR4/4褐色 シルト～極細砂 0.5～5cmの礫少量含 マンガン多量 (耕作床土)
- 7 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 瓦・凝灰岩片多量混 (溝5埋土)
- 8 10YR4/1褐灰色 礫混シルト～細砂 (1973年トレンチ埋め戻し土)
- 9 10YR6/2灰黄褐色 中～粗砂 (1973年トレンチ保護砂)
- 10 10YR4/3にぶい黄橙色 礫混シルト～極細砂 瓦・土器片少量混 (整地層)
- 11 2.5Y5/2暗灰黄色 粗砂混シルト～極細砂 3～10cmの礫多量含 (耕作溝)
- 12 攪乱
- 13 10YR5/2灰黄褐色 極細～細砂 0.5～3cmの礫詰まる (整地層)
- 14 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～極細砂 土器片少量混 (整地層)
- 15 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～極細砂 (地山相当層)
- 16 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト～極細砂 1～20cmの礫多量混 (地山相当層)

図8 1～4区断面図 (1:80)

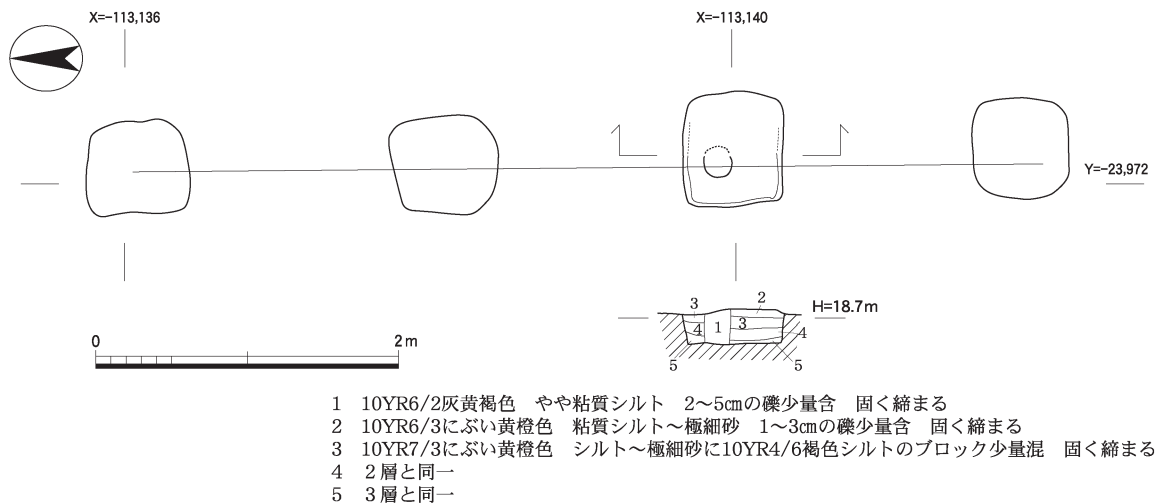


図9 柱列実測図 (1 : 50)

## (2) 遺構 (図7)

1区で、南北に並ぶ柱穴を4基検出した。並びはほぼ正方位を向き、柱間は1.9mの等間、柱掘形は一辺65~70cmの隅丸方形である。遺構保存のため、柱穴3のみ半裁して、埋土の状況を確認した。柱穴3の深さは約22cmある。埋土は、粘質シルト層を厚さ約5cmずつ版築状に固く叩きしめていた。掘形の中央やや北寄りに柱当が認められたが、埋土に2~5cmの礫が含まれることから(図9-1層)、抜き取りが行われたものと考えられる。柱抜き取り穴から推定される柱径は約20cm。西回廊に関連する遺構の可能性があるため、南北の延長線上で拡張を行った(拡張②③)。さらに、建物を構成する可能性を考え、柱穴1の東西延長線上にも拡張区を設けたが(拡張①④)、いずれも対応する柱穴は認められなかった。

1区の北半では、瓦溜り6・7を検出した。平安時代前期の瓦と、微量の土器片を含む。瓦溜り6は柱穴2を削平する。いずれも肩部の輪郭は明瞭ではなく、耕作時の攪拌により瓦類が集積した可能性が高い。

1区西端と、2・3区では西寺造営に伴うと考えられる整地層が認められた。平安時代前期の瓦と土器片を含む。整地の時期は明確ではないが、整地層の確認できる範囲が西回廊の推定位置に沿って、それより西に拡がることから、回廊の築造との関連が考えられる。

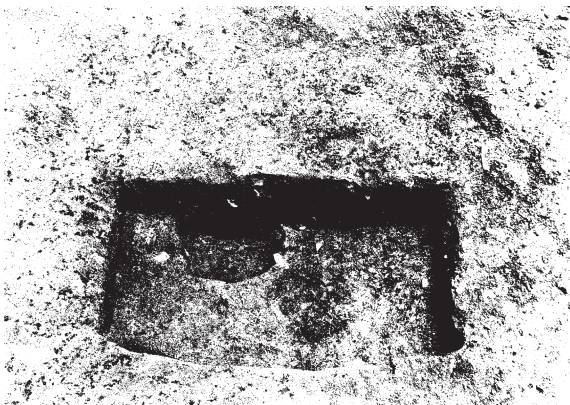


図10 柱穴3半裁状況(西から)

1区の東端には、耕作に関連する近代の遺物を含む溝が南北に走る。その溝を境に東側が一段高く、4区では1区より約20cm高い標高18.9m前後で遺構を検出した。東半では、1973年の調査トレンチの一部を確認した。遺構面の上は透明ビニールで保護されていた。南端で凝灰岩片と瓦が多量に混じる東西方向の溝

5を検出し、1973年調査の報告<sup>8)</sup>で西回廊の入隅から外へ排水する暗渠とされている箇所当たることが分かった。1区との境に走る耕作溝の断面で確認した溝5の残存深は約15cmある。1区南端の東側でも、凝灰岩と瓦片が混じる溝5の底が一部残存していた。この溝5は、4区全体に認められる微細な土器片を含む10YR4/3にぶい黄橙色のシルト～極細砂層の上から切り込まれている。この層は、1区との段差の断面で確認したところ地山相当層と考えられる礫混じりのシルト～細砂の無遺物層の上に乗っており、回廊基壇の整地土と考えられる。今回検出した整地土の残存厚は10～15cmで、上面の標高は18.9m前後である。過去の東回廊部分の調査で検出された基壇延石の上面の標高は調査8では約19.4m、調査16では約19.2mであることから、ここでは延石や礎石据付穴などは削平され、整地土の一部のみが残存したと考えられる。

また、1区と4区の南端でも1973年調査のトレンチの一部を確認した。調査報告には図が掲載されているのみで、遺構に関する記載は無い。削平を受け明確な遺構が認められなかったためと思われる。1区の北に設定した5区では、1区と同様の土層の堆積を確認した(図11)。耕作土と床土を除去し、地山相当層の礫混じりシルト～極細砂層の上面(標高18.75m)で近世の耕作溝を検出したが、西寺に関連する遺構は認められなかった。

## 4. 遺物

### (1) 遺物の概要

遺物は、整理箱にして5箱出土した。種類は、土器、瓦、石製品がある。土器・石製品は耕作土や耕作溝から出土したものが大半を占める。種類は、染付碗・皿類、磁器碗、施釉陶器の蓋付壺、器種不明の土師質土器片、硯などがある。時期は、19～20世紀の明治時代以降のものと考えられる。瓦は、平安時代の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。これらの瓦の中には二次的に火を受けたものが認められる。瓦溜り7からはややまとまった量の瓦が出土した。

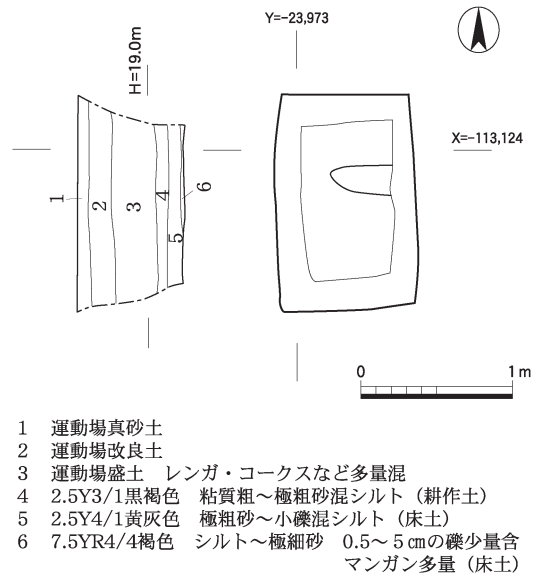


図11 5区遺構実測図(1:50)



図12 5区(北から)

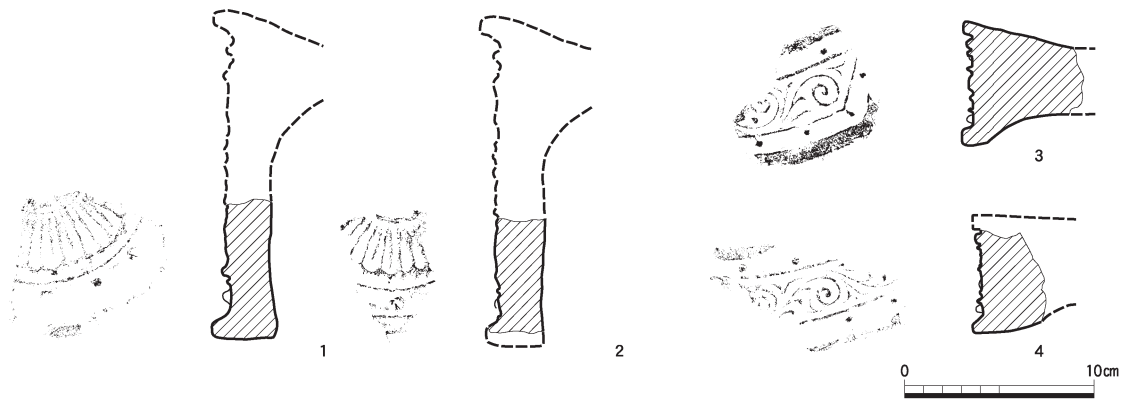


図13 軒瓦拓影および実測図（1：4）

## （2）瓦

軒瓦（図13、図版2）

軒瓦は4点出土した。1は、瓦溜り7から出土した複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。

蓮弁は細長く、弁と間弁が先端で連なり、外周は盛りあがる。界線は低く細い。瓦当裏面は横方向のケズリを行う。色調はN 4/0 灰色。胎土は石英・長石などの白色砂粒を多く含み、焼成は良好である。過去の西寺調査でも多く出土しているものと同范<sup>9)</sup>と考えられる。2は、溝5から出土した1と同文の複弁八弁蓮華文軒丸瓦である。火を受けて磨滅が著しい。1と同范の可能性が高いが、范の押し込みが弱く弁と間弁の外周の盛りあがりは低い。珠文と周縁の間には段がつく。瓦当裏面は不定方向に指ナデする。色調はN 3/0 暗灰色。胎土は石英・長石などの白色砂粒を含みやや粗で、焼成は良好である。3は、溝5から出土した均整唐草文軒平瓦である。瓦当の右1/3の破片であるが、同范例<sup>10)</sup>から、中心から唐草文が左右に3反転するものと考えられる。珠文帯の幅は狭く、珠文同士の間隔は広い。凹面は布目が残り、瓦当部は横方向のケズリを施す。顎部は横ナデ、凸面は不定方向のナデで仕上げる。側面は横ナデする。色調はN3/0 暗灰色。胎土は石英・

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
飛鳥時代	土師器	3箱	土師器1点	1箱	0箱
平安時代	土師器、須恵器		須恵器1点		
	軒瓦、平瓦、丸瓦、文字瓦		軒丸瓦2点、軒平瓦2点、丸瓦2点、平瓦11点、文字瓦1点		
近代	染付、磁器、施釉陶器、土師器	4箱		4箱	0箱
	石製品				
合計		7箱	20点（2箱）	5箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

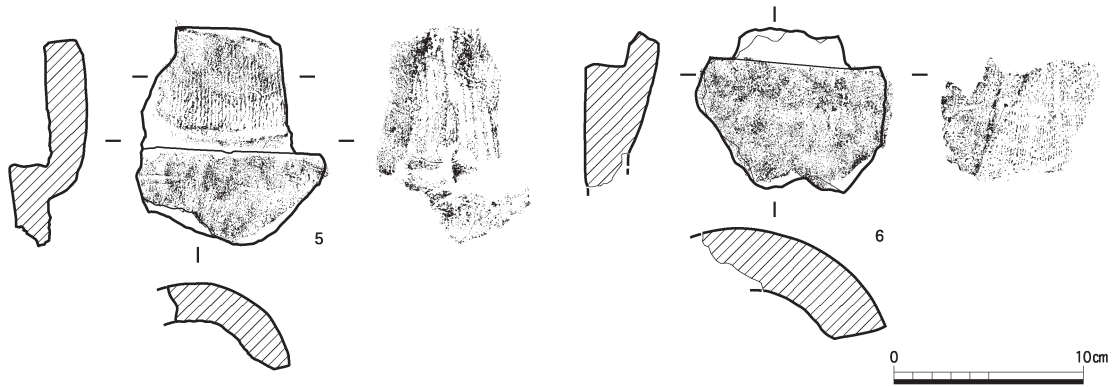


図14 丸瓦拓影および実測図（1：4）

長石・チャートなどの砂粒を多く含みやや粗。焼成は良好である。4は、瓦溜り6から出土した均整唐草文軒平瓦である。2次的に火を受ける。文様帯の幅、珠文の間隔から3と同范の可能性がある。中心飾りの右端と1反転目の唐草文が残存する。瓦当上面と顎部は横ナデ。瓦当裏面は平瓦が接合面ではがれており、接合面には丁寧に指ナデが施されている。色調は10YR6/3にぶい黄橙色。胎土は石英・長石・チャートなどの砂粒を多く含みやや粗。焼成は良好である。

丸瓦（図14・15）

調査区全体で、破片数にして61点の丸瓦が出土した。そのうち凸面の縄タタキのナデ消しがあまく、痕跡が明瞭に残るものが3点認められた。5は、さらに玉縁にも縄タタキを施す類例の少ないものである（図15）。瓦溜り7から出土した。玉縁部の縄タタキはほとんどナデ消しを行っていない。丸瓦との境は丁寧に横ナデする。色調はN3/0暗灰色。胎土は砂粒を含みやや粗。焼成は良好である。同じく瓦溜り7出土の6は、凸面の縄タタキののち丁寧にナデを施す。凹面の布目の網目はやや粗い。色調は2.5Y6/1黄灰色を呈する。胎土は砂粒を多量に含む。焼成は良好である。

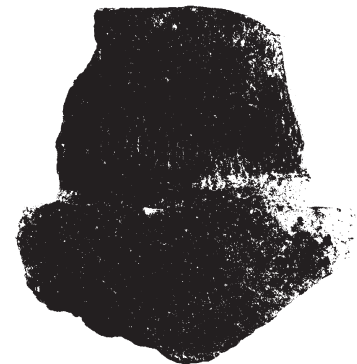


図15 丸瓦5玉縁縄目

平瓦（図16）

調査区全体で破片数にして341点の平瓦が出土した。大きくは、以下の3種類に分けられる。

A：厚みが2cm未満の薄手で凸面の縄タタキの縄目が細かく、焼成は硬質。凹面の布目は8本/cm程度の細かいものが多い。

B：厚みは2～2.9cm、縄目はやや粗い。胎土は粗く、布目は5本/cmないしは6本/cmのやや粗いものが多い。

C：厚みは3cm以上、粗い縄目をナデ消し、焼成はやや軟質。胎土は粗く、布目は8本/cmの細かいものが多い。

比率はA種が約24%、B種が約75%、C種が約1%である。

7は、瓦溜り7から出土した文字瓦である（図17）。A種で、凹面に「西」字が押印されている。

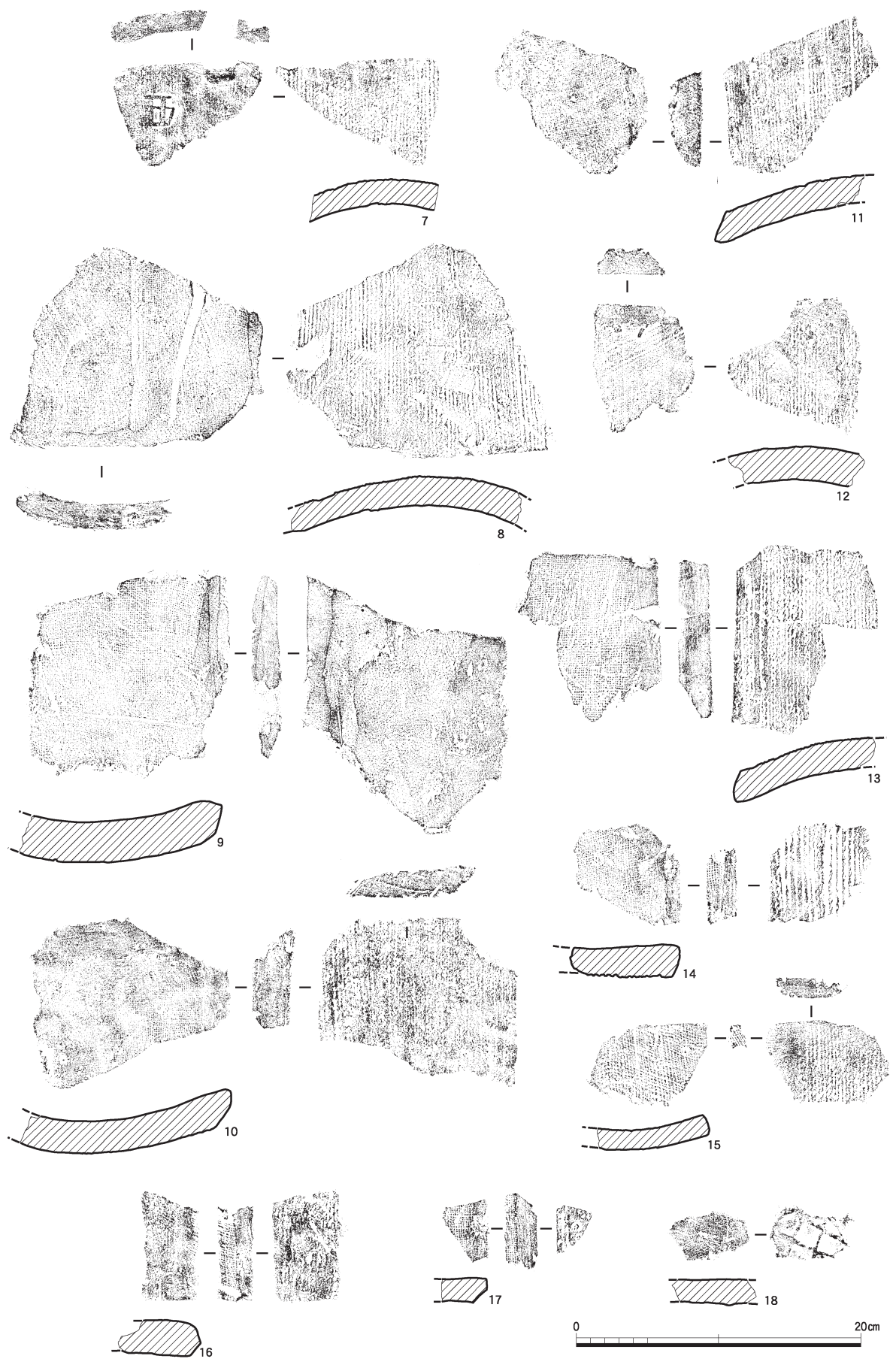


図16 平瓦拓影および実測図 (1 : 4)



印の幅は約 2.8 cm、文字の大きさは横 2.4 cm、縦 2.2 cm。文字の大きさと「西」字の右側のかすれ具合から、調査 23 (図 6) 出土の「西浄」と陽刻された平瓦<sup>11)</sup>と同じ印を用いたものと考えられる。色調は 10YR8/2 灰白色。胎土はやや粗。8 は、耕作土に混入した A 種の平瓦で、縄目はやや粗い。胎土は粗。色調は 2.5Y7/2 灰黄色。9 は、瓦溜り 7 から出土した。C 種である。凸面の縄目をヘラ状工具で掻き消す。色調は 10YR7/1 灰白色。胎土はやや粗。10 は、溝 5 から出土した B 種の瓦である。色調は 10YR4/1。胎土は石英を多量に含む。11 は、B 種で瓦溜り 7 出土。縄目はやや粗い。色調は 2.5Y5/1 黄灰色。胎土は粗。12 も B 種で瓦溜り 7 出土。凸面の縄タタキを一部ナデ消す。凹面にはコビキ痕が明瞭に残る。色調は N6/0 灰色。胎土はやや粗。

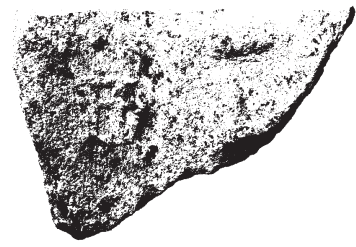


図 17 文字瓦 7

13～17 は、側面にも布目が付く平瓦である。平瓦製作技法を考える一つの資料となるものであり、瓦溜り 7 では側面の残存する平瓦の約 15% に布目が認められた。13 は溝 5 出土の B 種で、縄目は粗い。色調は 10YR7/3 にぶい黄橙色。胎土はやや粗。側面の一部にナデが及ばず、布目が残る。14～17 は瓦溜り 7 から出土したものである。14 は B 種で、側面の一部に布目が残存する。凸面縄タタキの縄目は非常に粗い。色調は 10YR7/1 灰白色。胎土はやや粗。15 は A 種で、側面は面取りを行わず、全面に布目が残る。色調は N5/0 灰色。胎土は精良。16 は B 種で側面の面取りが半分しか及ばないため、凹面と側面の境が明瞭でなく側面の布目が明瞭に残る。色調は 10YR8/3 浅黄橙色。胎土はやや粗。2 次的に火を受ける。17 は A 種で側面の面取りが及ばない部分に布目が明瞭に付く。布目は粗い。凸面の縄目はナデ消す。色調は N6/0 灰色。胎土はやや粗。

18 は凸面格子目タタキの平瓦である。瓦溜り 7 から出土した。格子目タタキの瓦はこの一点だけである。色調は 7.5YR7/4 にぶい橙色。胎土は精良。焼成は良好である。

### (3) 土器 (図 18)

19 は、耕作溝から出土した土師器杯の破片である。少片のため、口径は復元できなかった。体部は内外面ともナデで、口縁部は横ナデする。外面の口縁端部直下は強い横ナデにより浅く凹む。胎土は 1～2 mm の砂粒を多く含みやや粗い。焼成は良好である。7 世紀後半頃の所産と考えられ、西寺跡に重複する弥生～飛鳥・奈良時代の集落遺跡である唐橋遺跡に関連するものと考えられる。

20 は、瓦溜り 7 から出土した須恵器杯 A である。底部はヘラオコシで未調整。底部から体部への立ち上がりの屈曲部は丸みをもつ。胎土は砂粒を含まず精良。焼成は良好である。時期は 9 世紀前半頃かと思われる。

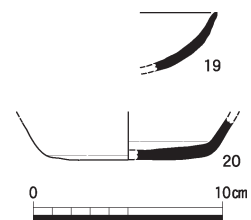


図 18 土器実測図 (1:4)

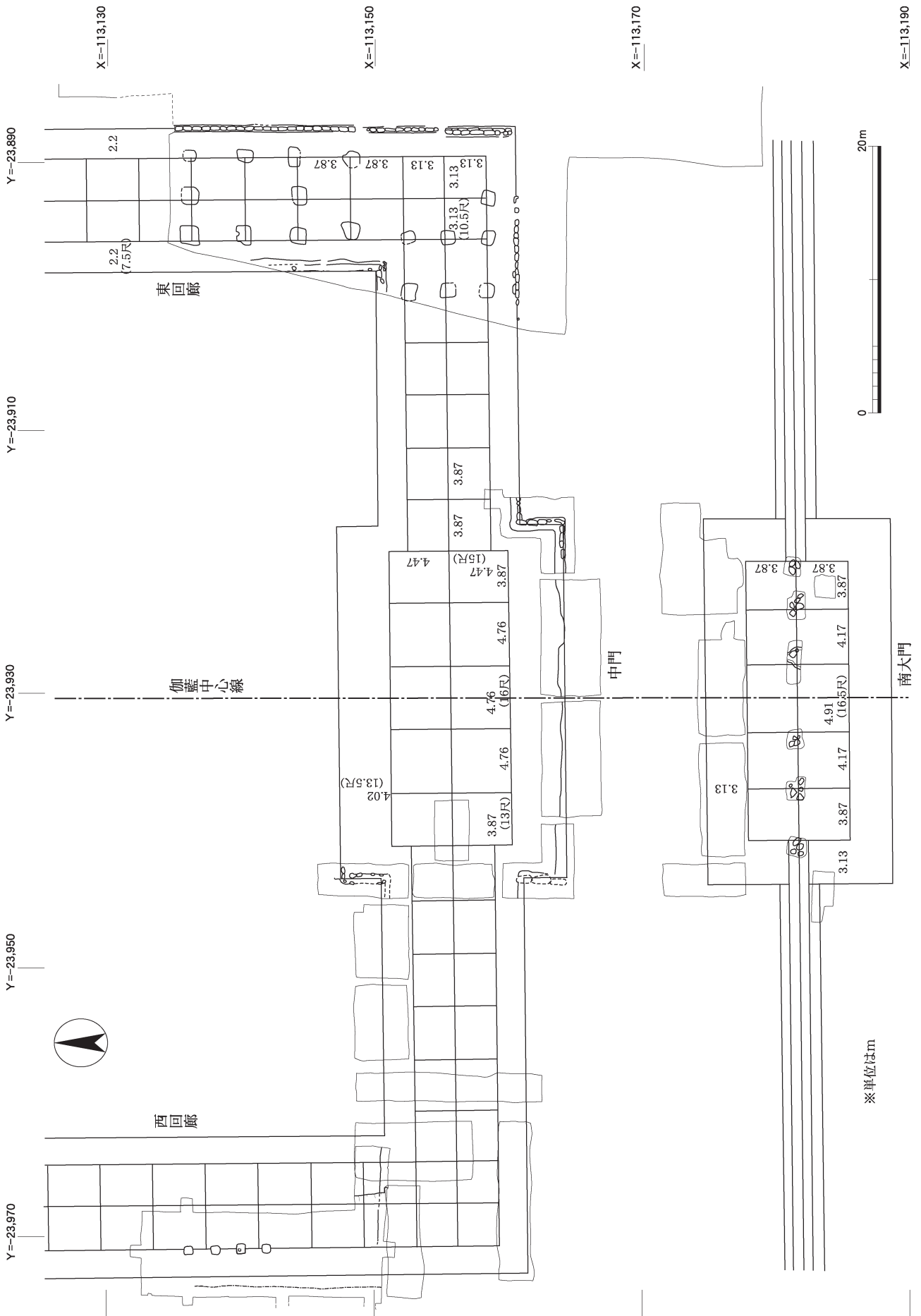


図 19 伽藍復元図 (1 : 400)

## 5. ま と め

今回調査した西回廊の対になる東回廊部分では1978年に発掘調査が行われ(図6-調査16)、東回廊の基壇と延石、礎石抜き取り穴が検出されている。それを、国土座標をもとに今回の調査成果と合成した。さらに、今回の調査で位置が判明した1973年の調査トレンチを加え、伽藍復元図を重ね合わせたものが図19である。復元図は、杉山信三が作成したものをもとに、調査16の成果を受けて一部修正を加えた<sup>12)</sup>。結果、中門・南大門・東回廊はおおよそ矛盾無く復元図と整合した。また、復元した伽藍の中心線と、計算上で求められる九条一坊十二町と十三町の中心線とのずれは、X=-113,150ラインで約30cmに収まる。以上のことから、南大門・中門・東西回廊部分については調査地の位置関係とそれから導き出される伽藍の位置をほぼ確定できたと思われる。

そこで、今回の調査で検出した南北3間分の柱列を見ると、西回廊の西柱列のライン上に乗ることがわかり、西回廊に関連した遺構の可能性が考えられた。ただし、本来は西回廊も東回廊と同様、礎石建ちの複廊であったはずであり、今回検出した遺構が掘立柱の柱穴であることから、どの段階で成立したものが問題となる。柱穴の形状が隅丸方形の版築状の埋土、整然とした並びは平安時代としても比較的古い時期に特徴付けられるものであり、西寺が衰退した鎌倉時代以降のものとは捉え難い。また、西寺の造営については2-(1) 歴史的環境でも触れたように、史料からは最後の塔の造営に取りかかるまで約1世紀近くも要していることがわかり、造営が着々と進行したわけではないことが推測される。そうしたことから類推して、この柱列は回廊が完成するまでの期間に、何らかの区画が必要とされたために、回廊を意識して構築された施設である可能性を考えておきたい。

最後に、今回の調査は遺構の保存を前提としたものであり、一部の遺構を除いて掘り下げを行っていないため、遺構の時期や性格については不明な点も残る。しかし、西寺に関連する遺構の残存を確認できたことは大きな成果であり、また、過去の調査地点を把握できたことは、今後の調査に繋がる成果である。それをもとにした西寺全体の伽藍復元の再検討を今後の課題としたい。

### 註

- 1) 杉山信三『史跡西寺跡』鳥羽離宮跡調査研究所 1977年
- 2) 梅原末治「西寺址」『京都府史蹟勝地調査会報告』第二冊 大正9年 この報告では「金堂址」として報告されている。
- 3) 杉山信三「西寺と東寺」『平安京提要』角川書店 1994年
- 4) 前掲註3) 文献のp.381
- 5) 堀内明博「西寺跡第13次調査」『平安京跡発掘調査概要』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
- 6) 菅田 薫「平安京右京九条一坊1」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 7) 菅田 薫「平安京右京九条一坊2」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋

蔵文化財研究所 1993 年

- 8) 前掲註 1) に同じ
- 9) 平安博物館編『平安京古瓦図録 解説編』雄山閣 1977 年 p.216 の 25
- 10) 平安博物館編『平安京古瓦図録 解説編』雄山閣 1977 年 p.233 の 301
- 11) 鈴木久男他「平安京右京九条一坊 1」『昭和 61 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989 年 p.44 図 3-9
- 12) 前掲註 1) 掲載の復元図をもとに、回廊の南北の柱間を、約 3.74 (12.5 尺) から南回廊の東西柱間と同じ約 3.87 m (13 尺) に修正した。また、回廊基壇の幅を約 10.7 m (36 尺) に復元した。

# 版 图



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうあと・しせきさいじあと							
書名	平安京跡・史跡西寺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2007-4							
編著者名	柏田有香							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2007年9月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと・ 平安京跡・ しせきさいじあと 史跡西寺跡	きょうとしみなみく 京都市南区 からはしさいじちよう 唐橋西寺町  65番地	26100	A751	34度 58分 48秒	135度 44分 15秒	2007年7月 23日～2007 年8月20日	170㎡	児童館 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡  史跡西寺跡	都城跡  史跡	平安時代	柱穴、溝、西回廊 基壇整地土	土師器、須恵器、軒丸 瓦、軒平瓦、丸瓦、平 瓦、文字瓦				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-4  
平安京跡・史跡西寺跡

発行日 2007年9月28日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1  
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社  
住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地  
〒 604-0093 TEL 075-256-0961